

# 被災地 NGO 協働センター2014 年度事業計画

## 阪神・淡路大震災から 20 年もう一度原点に戻ろう

2014年3月11日で東日本大震災の発生から丸3年が経った。複合災害の特徴である福島第1原発の過酷事故をはじめ、広域災害による避難生活の長期化などこれまでに経験のない課題が山積している。

2015年1月17日には阪神・淡路大震災から丸20年を迎える。一方、この3年間支援に奔走してきた東北を振り返ってみると阪神・淡路大震災と同じ課題も少なくない。

例えば、障がい者の死亡率は健常者に比べ2倍にも上り、「社会的弱者」の方々が被害を受ける現実には20年間変わらない。さらに震災関連死にいたっては、阪神・淡路大震災のころよりも悪化し、特に福島県の場合、直接死を超えるという深刻な事態を招いている。

また、阪神・淡路大震災から20年・新潟県中越地震10年間のあいだに、災害発生時には地域の社会福祉協議会が中心となり災害ボランティアセンターが設置されるという仕組みが整備されてきた。しかし、東日本大震災時には災害ボランティアセンターの受け入れ体制が整っていないためボランティアに行くなという論調が非常に多くみられ、結果としてボランティアの足を止めてしまった。このことは、システムに依存することで、ボランティアの多様性を阻害しているとも言えるだろう。

阪神・淡路大震災で多くの初心者ボランティアは、マニュアルもなしに被災者に寄り添ってきた。そして多様な関わり方の中で一人ひとりを支えてきた。その中で、たった一人を大切にすること、ボランティアの多様性があるからこそ多様な被災者を支えることが出来ることに気づいた。ところが、東日本大震災の被災地での課題には、まさに多様なボランティアの関わりが必要とされているにも関わらず、それが十分に出来ていない現実がある。

もう一度、原点に戻る必要があるのではないかと。3.11の課題を解決するために1.17へ立ち戻り、そして、大切なことを確実に次世代に伝えていくことが必要なのではないかと。そのためには、お題目のように難しい言葉を並べるだけでなく、より身近なところで自分自身に引き寄せた問題として捉え、多様性を認め、排除されない包摂性を持った場づくりが必要だ。

阪神・淡路大震災の後、『市民とNGOの「防災」国際フォーラム』では、「神戸宣言」を発表し、その後KOBEからの発信を行ってきた。

そこには、今まさに東北の被災地で必要なことが書かれている。

希望の追及と怒りの声を高くあげよう。もっと被災の厳しい実情を声高に語ろう。外国人、高齢者、障害者、女性、子どもを核に、人々のネットワークをつくり広げよう。(中略)

被災地の私たちは、自ら「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」行動を重ね、新しい社会システムを創造していく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏み出していくことを、強く呼びかける。

20年前からのこの発信を、いかに次世代に伝えていくのか。これが阪神・淡路大震災20年を経た私たちの課題だろう。それを受け継ぐ次世代も受け身になるのではなく、新たな価値観を作り出さなければならない。新たな社会を生み出し、そしてこれからの未来を暮らしていくのは次世代自身に他ならないからである。特に次世代を担う若者が積極的に自ら語りだし、学び、つながり、つくり、決めていくことが、20年の経験を受け継いでいくことにつながる。

このように次世代への継承を意識しながら、多様性を認め、他者を排除しない包摂性を持った場を作り続けていきたい。(頼政良太)

### ■事業概要

#### 1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民とNGOフォーラム2015」と連動し、阪神・淡路大震災から20年を意識しながら実施したい。特に次世代へどのように経験を引き継ぐのかを意識するため、何名かの若者に企画段階から関わってもらい、次世代が主役となる場づくりを進めていく。若者世代にとって、阪神・淡路大震災から東日本大震災を考えるよりも、東日本大震災から阪神・淡路大震災を考えることの方が身近で考えやすく、自分のこととして考えられるため、

東日本大震災や「フクシマ」についての寺子屋も開催する。

## 2. まけないぞう事業

昨年同様、関心が薄れ販売は低迷しているが、今年度は販売目標を3万個とする。そして、阪神・淡路大震災20年目のメッセージも発信しながら、新規開拓・リピータなどの掘り起こしを行い、一層の販促の強化に励む。

東北でのまけないぞう事業は今年度も継続する。被災地ではまけないぞうが「生きがい」となっている作り手さんも多く、その想いをどのように発信していくかを模索していく。また、神戸大学東北ボランティアバスとの連携の中で作り手同士の横のつながり作りを進めながら、当事者の自立をどのように支えていくかを考えていきたい。

## 3. 災害救援事業

災害時には迅速に対応する。特に被災者一人ひとりに対する寄り添いの視点を忘れず、かつ災害時要配慮者の支援に重点を置き続ける。また、将来予想される大災害（南海トラフ巨大地震など）を念頭に置き、事前に顔の見える関係づくりを進めていくとともに、KOBEや東日本大震災の経験を活かし、しっかりと伝えていく。

## 4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

引き続き、被災者と直接対面している足湯ボランティア活動やまけないぞう活動から見える提言を行っていく。足湯ボランティアに関しては、東京大学被災地支援ネットワークとの連携の中で、足湯ボランティアの書籍発行を進めることが提言につながるだろう。まけないぞう活動においても同ネットワークが岩手県での被災地グッズ事業の組織化に取り組んでおり、「災害時ボランティア経済圏」という論の確立に協力していく。そして、阪神・淡路大震災から20年目に入り、市民・NGOとして次世代に伝えるための提言づくりに取り組む。

## 5. 広報事業

昨年同様、機関紙やHP等で広報活動を行っていく。

## 6. その他

脱原発リレーハンストを継続する。

### ■事業内容

#### 1. 寺子屋事業

(A) 阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォー

ラム2015と連動した寺子屋を開催

年6回程度の予定。※ワークショップ形式も開催

(B) その他

基本方針に合致すると思われるテーマに置いても可能な限り開催する

## 2. まけないぞう事業

(A) 東日本大震災支援の継続

現在、作り手さんは81人。卒業する方もいるが、ニーズは増えている。ただ販促が追いつかず作り手を増やすことは難しい状況。また、ドイツの支援者から放射能を心配する声があり、東京の青木正美先生（青木クリニック）に監修して頂き、検査を行いながら出荷をすることとなった。

神戸大学ボランティアバスのメンバー等と連携しながら、現地での被災者との交流や販促に向けた議論や活動をしていく。

(B) 広報・販促に関して

当事者の情報を丁寧に発信し、支援者と被災者をしっかりとつなげることを意識する。HP・リーフレットなどの更新を行いながら、販売強化を努力する。

(C) まけないぞうミーティング

神戸大学東北ボランティアバスのメンバーを中心にしながら、ミーティングを2か月に1回程度開く予定。

4/12 第1回まけないぞうミーティング

(D) その他

・被災地ツアー

1ヶ月から2ヶ月ごとにスタッフと同行するかたちで、数名単位で現場視察やボランティア活動を行う。呼びかけについては、ML、HP、Facebookなどを通じて行う。被災地への関心を持ってもらうと同時に販促にもつなげていく。

## 3. 災害救援事業

(A) 災害発生時の対応

これまで築いてきた震災がつなぐ全国ネットワークとの関係やその他のネットワークを活かしながら、災害発生時にはすばやく被災地へ入り活動する。

(B) 東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業は神戸からのサポート体制を引き続き行っていく。また、福島などからの県外避難者の支援を継続するとともに、福島に住み再建活動（再生エネルギー活動）に取り組む人たちへの直接支援を始める。東京大学被災地支

援ネットワークとの連携は継続し、足湯ボランティアに関する書籍の発行に関わる。また、震災がつなぐ全国ネットワークの事業として、足湯ボランティアのつづやきガイドブックづくり（助成：日本財団）を担う。

#### (C) 復興支援活動

- ・まけないぞう事業

2. を参照

- ・KOBE 足湯隊のサポート

KOBE 足湯隊の事務局として引き続き活動をサポートしていく。また、神戸学院大学の佐用町での活動を通じて KOBE 足湯隊と神戸学院大学との連携を図る。

#### (D) 南海トラフ巨大地震に備えて

- ・女性が担う地域防災塾との協力

2013 年度に引き続き、たつの市での活動等に積極的に関わっていく。

- ・お寺防災の継続

アユス関西や仏教青年会との連携も図りながら、2013 年度に開催したお寺防災でつながった各寺院での防災寺子屋の普及に力を注ぐ。

- ・高知県黒潮町などとのつながりを継続

2013 年度につながった高知県黒潮町やその他の地域とのネットワークを引き続き継続していく。

### 4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

#### (A) 「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」の開催

阪神・淡路大震災から 20 年目に突入したが、東日本大震災でも阪神・淡路の時と何も改善されていないことが多数見受けられる。なぜ変わらない・伝わらないのか、どうすれば伝わるのか、次世代へ伝えるという切り口で議論を続け、何らかの形で表現していきたい。

準備会 (4/8、5/9)

#### <関係団体・グループとのネットワーク>

- ・しみん基金 KOBE/副理事長
- ・震災がつなぐ全国ネットワーク/団体会員
- ・人と防災未来センター/事業評価委員
- ・日朝兵庫友好の会/常任委員
- ・レスキューストックヤード/評議員
- ・CODE 海外災害援助市民センター/理事
- ・日本災害復興学会/会員

- ・内閣府防災ボランティア活動検討会/メンバー
- ・関西学院大学災害復興制度研究所/外部研究員
- ・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会
- ・9 条の会ひょうご
- ・避難・移住・帰還の権利ネットワーク
- ・KOBE ピース i ネット
- ・日本防災士機構/講師

(その他)

神戸大学非常勤講師/神戸学院大学非常勤講師/福井大学非常勤講師/神戸松陰大学非常勤講師

### 5. 広報事業

#### (A) 通信「じやりみち」の発行

年 4 回の発行を予定

(6 月/10 月/1 月 17 日/3 月 11 日)

#### (B) ホームページの充実

HP はリニューアル予定

また、サーバーの関係でメールアドレスも変更する

新メールアドレス：[info@ngo-kyodo.org](mailto:info@ngo-kyodo.org)

#### (C) Facebook の利用

引き続き Facebook でも情報発信を行う

#### (D) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。

- ・ハンストニュース
- ・まけないぞうがつなぐ遠野物語
- ・その他関連ニュース

### 6. その他

#### (A) 脱原発リレーハンストの継続

2012 年 6 月 14 日～引き続き原発がゼロになるまで発信していく。

5/28 リレーハンストの今後についてのミーティング